エロイカ変奏曲

三田誠広

角川書店

エロイカ変奏曲

三田誠広

エロイカ変奏曲
三田誠広

昭和五十七年一月三十日　初版発行

発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三〈二六五〉七一一一大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八〈郵〉一〇二

大日本印刷・宮田製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093―872327―0946 (0)

エロイカ変奏曲

装丁　岡村元夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

導入——低声部提示

……さて、こうしていま、ペンを執(と)って、僕は書こうとしている。あなたとの出会いと、わずかばかりの触れ合いについて。けれども、いったい何から書きはじめればいいのだろう。あまりにも書くことが多すぎ、そして、ほんとうは、書くべきことなど、何もないのかもしれない。あなたというひとが、つかのま、僕の目の前にいた。それだけのことだ。あなたにとって、僕は、たえまなくうつりかわっていく風景の、記憶にも残らない微かなひとこまにすぎないのだし、僕にとって、あなたが何だったか——そんなことを、いまさら考えてもしようがない。

とはいえ、僕はいま、書こうとしている。あの作品三十五の変奏曲の、最初の和音が響き、不気味な低声部が流れはじめる時、それにひきつづく十五の変奏と終曲の遁走曲(フーガ)が予感されるように、いま書きつづっているこれらの言葉が、これから始まる物語の主調音を、正確に、あなたの、

そして（もしも読む人があればの話だが）読み手の胸のうちに響かせることができればいいのだが。

暗い夜だった。――そうだ、やはり、あの夜のことから書きはじめなければならない。あなたのことを考えると、きまって、あなたと初めて会った、あの夜のことが想い浮かぶ。しかも最も強く印象に残っているのは、あなたの部屋の中の様子や、あなたの顔や、そこで交した会話ではなく（あなたの顔は写真で知っていたから、実物を見てもそれほど強い印象は受けなかったし、あの夜のあなたは、僕とはほとんど口をきいてくれなかったから）、あの白塗りの王宮のようなマンションを、遠くから見上げた時のイメージなのだ。

その頃の僕が、どんな生活を送っていたかを、ここに詳しく書こうとは思わない。人間の貧しさ（生活の貧しさだけでなく、精神の貧しさをも含めて）などというものを文字でいくらつづったところで、あなたに具体的な手応えをもった何かを伝えることなど、とうてい不可能だろうから。とりあえず、あの頃の僕は、自分が生きていくための最低限の収入しかなく、また未来に何の希望ももっていなかったこと、そして、希望なんてものは自分には必要ないと思いこんでいた、ということを書きとめておけば十分だろう。

あのマンションは、僕にはほんとうに、お城のように見えた。そういうところに住んでいる人間は、僕らとは、階層が違うというだけではなく、何だか、人種まで違っているのではないか―

―例えば、お互いに、日本語で話をしていても、どこか言葉が通じあわず、まるで、パンを要求する民衆の陳情に、パンがなければケーキを食べればいいのに、と答えたマリー・アントワネットを相手にするような――そんなことになるのではないかという、根強い偏見を、僕はもっていたのかもしれない。

もちろん、僕だって、〝豪邸〟に居をかまえる人種とのつきあいが、まったくないわけではなかった。ゴーストライターという奇妙な仕事をするようになってから、三年近くになる。僕は、仕事熱心な人間ではなかったけれど、それでも最低限の生活を維持するために、年に何冊かの本を書いた。自分の署名入りの本は、一冊もない。つまり、出た本の数だけ、《有名人》なり《成功者》とつきあったことになる。

僕の仕事で最も成功したのは、大相撲の人気力士、大関花乃山を育てた、花風親方の著作だった（どうでもいいことだけど、「つっぱり人生」というのがタイトルだ）。僕は一週間、相撲部屋に泊まりこんで、稽古に立ちあったり、ちゃんこ鍋をつついたりした。親方の話は、ろくに聴かなかった。自分が目にしたものと、伝聞と、あとは想像力で、適当に苦労話や、面白いエピソードをでっちあげる。それが僕のやり方だ。取材をしすぎて、事実にとらわれすぎると、話がふくらんでいかない。事実なんてものは、どうでもいい。

どうせ、他人の書いたものに、自分の名前を付けて売り出すことに同意した連中なのだから、

細かい事実にこだわったりはしない。この現代の社会で、《有名人》であったり《成功者》であるということは、それ自体が一つの虚構なのだ。たぶん僕は、自分の仕事に、いくらかなげやりになっていた。自分を卑下し、その反動で、取材する相手を、馬鹿にしていた。でも、それは、たいしたことじゃない。誰だって、いまの自分というものに、満足しきって生きているわけじゃない。

もっとも、僕は、ふつうのゴーストライターと比べたら、割のいい条件で仕事をしていた。僕の仕事には、付加価値がある、と金子さん（プロダクションの代表者で、あの夜も、金子さんと一緒に、あなたのところに行ったわけだけど）は言う。自分でも、そう思う。ただ取材したことを書くというだけではなく、僕の場合は、まあ言ってみれば、少しばかり文学的な味付けをほどこすわけだ。《有名人》とか《成功者》とかいった人たちにも（あるいは有名であればあるだけ）孤独な側面がある。そいつを、成功譚（たん）の中に、さりげなくなげこんでおく。ありきたりといえばありきたりだけど、一種の特技として、とにかくそれをメシのタネにしている。人間の寂しさや、痛みを嗅（か）ぎわける勘みたいなものが、僕にはある。それはきっと、僕自身が、孤独な人間だからだろう。

金子さんには世話になっている。ちっぽけな下請けのプロダクションで、つかいばしりのデータマンをやっていた僕をひろいあげて、いまの仕事をやらせてくれたのも金子さんだ。条件のア

ップも、こちらが要求したことは一度もない。いつも金子さんの方から提示してくれる。もっとも、僕の仕事で、金子さんもかなり儲けているはずだから、世話になった借りは、返せたと思う。

だからこちらも、仕事を択ぶ。気のむかない仕事はやらない。食べるものにしても、着るものにしても、贅沢をする趣味はないから、四畳半一間の部屋代と、かつかつの食費さえあれば、ぶらぶらしている。仕事を択ぶといっても、取材の相手に、こちらの好みで条件をつけるわけではない。反対に、ヘドが出そうな、いやなやつとコンビを組む方が、むしろ気分よく仕事ができる。そういう人物に、むりやり文学的香りをまぶしつけてやる（むろん悪意をこめて——）。その方が、意外性があって、読者にもウケるし、こっちも、やりがいがある。

真木五月——。二十六歳。美貌のピアニスト（現代はタレントとしても活躍中）。十四歳の時に、来日した天才指揮者、L・V・ヘルツシュタインに見出されて、渡墺。数々の音楽コンクールで入賞。三年前に帰国。全国各地でコンサート。来日したウィーン交響楽団との競演。テレビ出演（さらに後に、映画に出演して、女優としてのスタートを切る）。離婚歴二回。その他にもいくつかのゴシップあり。一年前の週刊誌記事に関して、編集長と記者を告訴、現在審理中……。

十分に俗悪で、十分にケバケバしい。金子さんから話をもちかけられた時、一も二もなく、僕は仕事をひきうけることにした。僕は、音楽には興味がなかった。あなたの演奏も、聴いたことがなかった（聴いたところで、上手下手が判るわけではないけれども）。あなたが出た映画の予

告スポットを、テレビで見かけたことはある。それから、いつだったか、深夜のショー番組に、ゲストとして出演しているあなたを見た。眼に特徴のある、まずまずの美人だ、と思った。喋り方が、いかにも自信たっぷりで嫌味だな、と感じた。それだけのことだ。格別、深い印象は受けなかった。あなたくらいの美人は、ざらにいる。あなたくらいの話題性をもったタレントも、次から次へと、めまぐるしいほどに、現われては消えていく。それ以上の何が、あなたにあるというのか。確かにあなたにも、悩みや、悲しみはあるだろう。あなたにも、人には気づかれない孤独な一面があるはずだ。けれども、あの「つっぱり人生」の花風親方だって、やっぱり、孤独な一面をもちあわせているのだ。

あの暗い夜の街路で、あなたが住んでいるという王宮のようなマンションを見上げている時、僕が抱いていたあなたというもののイメージは、およそ、そんなところだった。つまり、あなたは僕にとって、何ものでもなかった。ただの取材相手にすぎない。そして、これから仕事にとりかかろうとする時、僕はいつもそうなのだが、自分の仕事にも、仕事の相手にも、何だかわけのわからない、憎悪のようなものを感じていた。

それにしても、何という暗い夜だったろう。それに、かなり寒い夜でもあった。もとはといえば、金子さんが道をまちがえて、あなたのマンションのまわりをぐるぐるうろつく破目になったことが原因だ。あの王宮は、高台の上にある。だから、遠くからでも、すぐ目につくわけだが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近づいてみると、いたるところに崖があり、墓地があり、広い屋敷や学校があって、なかなか丘の上にたどりつけない。道はやたらに細く、不規則に交叉し、しかもパズルみたいに意地のわるい一方通行の標識がやたらと立っていて、僕らが乗ったタクシーは、迷路のように同じところを何度も行ったり来たりした。

結局、僕らは、クルマを降りて歩きはじめた。両側に長く塀が延びている、街灯もないまっ暗な坂道を、僕らは寒さに身体をふるわせながら、黙々と登っていった。はるかな高みに、白い壁が見えた。そのまぶしいくらいに明るい場所に、いつになったら行きつけるのか。たどりついたところで、そこに温かいものが待っているわけではない。お金のためと、少しばかり意地のわるい気晴らしのために、僕のエジキとなるひとりの見栄っぱりの女（と僕は勝手に決めこんでいた）がいて、めんどうな初対面の挨拶を交さなければならない。急な坂道の傾斜のせいばかりではなく、僕の足どりは重かった。

やっとのことで、僕らはマンションの玄関に立った。あなたの部屋は、二階にある。二階といっても、一階は半地下式になった駐車場だから、実質的には一階だ。エレベーターは使わず、短い階段を昇って、吹き抜けの廊下に出た。あなたの部屋は、つきあたりだ。長い廊下を、急ぎ足で歩きながら、低い声で、金子さんがささやきかけた。

「わかっているだろうけど、言葉づかいとか、態度とか、とにかく慎重にやってくれよな。何

しろ、怖ろしいくらいにわがままな、気ぐらいの高い女なんだから……」

「いちおう、わかってるつもりですがね……、僕は、僕のやり方でやりますよ」

そんなふうに、僕は答えた。

導入——その二

ほっそりとした初老の婦人が、僕たちを部屋に招きいれた。狭い玄関から、一歩中に踏みこむと、二十畳以上の広いリビングルームがあり、ピカピカに磨かれた木の壁と床がまず目についた。部屋の奥に、グランドピアノがあり、手前の方には、八畳くらいの絨毯が敷かれていて、そこが客と応対するスペースになっている様子だった。

あなたの姿は見えなかった。僕らはとりあえず、絨毯の上に腰をおろした。椅子はなく、低いテーブルのまわりに座布団がわりのクッションが配してあった。ピアノの脇に、長椅子と本棚があり、その手前に、スピーカーやアンプ類と、小さなサイドボード、それ以外には家具らしいものもない、だだっ広い部屋だった。

入った時には気づかなかったが、玄関の脇に、別のドアがあり、その先は、プライベートスペ

ースになっているらしい。そのドアが、突然、乱暴に開いて、真っ赤な部屋着を着たあなたが、つかつかと踏みこんできた。いま、部屋着、と書いたが、正確なところは、何だか判らない。ふわふわした、不定形の衣裳で、最新流行のドレスだといわれれば、そんな気がするだろうし、ネグリジェだといわれれば、確かにそのままベッドに入りこんでも不自然な感じはしなかった。生地はやわらかそうで、つやつやと光っていた。ヒラヒラがやたらとついていて、そこだけを見ると、きらびやかなドレスを思わせたが、ヒラヒラ以外の部分は、水着みたいにピッタリと身体にまといついていて、露骨なほど身体の線が浮きだしていた。

「遅かったわね」

と、怒ったようにあなたは言った。それから大またに、僕らのすぐそばまで歩いてきて、絨毯の上に足をなげだして坐った。

「道をまちがえましてね」

と金子さんが言った。女性と話をする時、金子さんは、いつでも、とぼけたような上っ調子の喋り方をする（もちろん僕らに向かって喋る時は、ヤクザみたいな口ぶりになる。取材が縁で結ばれたという元ファッションモデルの奥さんとは、どんな口のききかたをしているのだろう）。それで会話を自分のペースにひきこもうとするのだろうが、あなたの方が、役者が一枚上手だった。

「つまんない言いわけしないでよ」
ピシャリと、あなたは言った。金子さんは、唇の端を歪めて、うす笑いをうかべた。劣勢になると、このひとはこういう顔つきになる。僕は何だか、ひどくおかしかった。
「それより、週刊タイムスに、あたしの記事が出てたけど、あれ、あなたなの」
「いえ、とんでもない」
「じゃあ、誰？」
「知りませんよ。タイムスの記者でしょう」
「誰かが情報流したんだわ。あたしが長野に行ったことなんか、誰も知らないはずなのに」
「コンサートをおやりになったんでしょう」
「うちわの会なのよ。畑山先生がおみえになったなんて、知ってるのは、あなたと――」
「マネージャーはもちろん知ってるでしょう」
「福田クンが？　そう……ありうるわね」
「畑山先生は、いま、どちらですか」
「そんなこと、どうだっていいでしょ」
「いえ、ちょっと用があったものですから。ご存じかと……」
「知らないわよ。奥さんにきいてみたの？」

「ええ。行方不明だそうで……」
「嘘よ。あなたを警戒してるんだわ」
「そうかもしれませんね」
あなたは、僕になど、目もくれなかった。挨拶しないどころか、こちらを見ようともせず、金子さんだけに話しかける。僕は、まるで、透明人間になったような気分だった。金子さんは、あなたと、かなり親しそうだった。そんな話は聞いていなかったので、少しびっくりした。べつに興味もなかったが、自然に耳に入ってくるので、あなたと金子さんの話を聴いていた。週刊タイムスの記事というのは、読んでいなかったから、何のことかわからない。畑山先生、というのは、あの有名な、畑山祐三郎（アメリカ在住の物理学者で、学界の最高の栄誉であるニュートン物理学賞の受賞者――このところ日本に一時帰国して、テレビなんかによく顔を見せている）のことだろうか、などといったことを、ぼんやりと考えた。
「来週、パーティーやるのよ。来る？」
「何のパーティーですか」
「何のってことはないのよ。理由がなければパーティーやっちゃいけない？」
「いや、けっこうですね。理由があると、何かと厄介ですから」
「このところ、面白くないことばかりだから」

「気晴らしですか？」
「みんなでワーッと騒ぎたいのよ」
「じゃあ、理由はやっぱり、あるわけだ」
「来るの？　来ないの」
「来ますよ。ここでやるんですか」
「そうよ。食べるものは、あたしが作る」
「ほう」
「馬鹿にしないでよ。料理くらいできるんだから」
「でも、あとかたづけは節子さんでしょう」
「そりゃあそうよ。あのひとは、そのために存在してるんだから。あら、お茶も出てこないわね。節子さん、節子さん――」
よくとおる高い声だった。玄関の脇のドアから、さっきの初老の婦人が顔を出した。
「何やってんのよ。お茶を出しなさいよ」
「おや、ごめんなさい。お声がかからないから――」
「言わなきゃ、お茶も出ないの？　ほんとに、何考えてんだか……」
「はいはい、いますぐに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com